

教員がLGBTの子から 相談されたとき

前節では、子どもからのカミングアウトの相手の多くが同級生であること、教員への相談は少ないことを取り上げました。中高生世代では、自分の悩みや感じ方を共有したり、恋愛やセクシユアリティに関する話をする相手として同級生を選ぶことが一般的です。

一方、「制服を切り替えたい」「プールの授業が苦痛」など具体的な困りごとを抱えている場合、学校生活をよりストレスの少ないものにしたいたいと考える子どもは、教員に相談をすることがあります。この節では、子どもからのそのような相談を教員が受けた際の対応について取り上げます。

望む対応は一人ひとり違う

性別違和のある中学生から、私が相談を受けたときの話です。その生徒は女子の集団で着替えることが苦痛で、一人で着替えることを希望していました。自分を男の子だと思うのに異性の集団の中に入れられるのは恥ずかしくてたまらない、自分の体を見られるのも苦痛だと言います。

私からは、時間をずらしたり、場所を工夫したりすることを提案しましたが、「変だと思われるしまう」「トランスジェンダーだと知られてしまうのではないか」との不安も口にはしています。実際にやってみたらなんてことはないと感じるのかもしれないかもしれませんが、他の人たちは違うことを試すことに、まだふんざりがつかないようでした。

本当はスカートの制服も苦痛なのだと、その生徒は話していました。制服を切り替えるのは一人を着替えることよりもさらに目立ちます。家族にはカミングアウトをしていないので、制服を切り替える場合にはどう説明をするかも作戦を練る必要があります。この生徒のように、学校での困りごとが多岐にわたっているケースはよくあります。どこからだったら着手しやすいのか、どんな解決策があり得るのかも、人によって異なります。

文部科学省が二〇一六年に発行した「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」というリーフレットには、性別違和などを背景として配慮を必要とする子どもに対して、どうやって個別対応ができるのかの事例が多数紹介されています。例えば服装については「自認する性別の制服・衣服や、体操着の着用を認める」、髪型については「標準より長い髪型を一定の範囲で認める(戸籍上男性)」、更衣については「保健室・多目的トイレ等の利用を認める」、呼称については「校内文書(通知表を含む)を児童生徒が希望する呼称で記す」などの事例が紹介されています。

このリーフレットは、これから個別対応を検討する学校にとっては参考になる部分の多い、とても貴重な資料です。ただ気をつけたいことは、あくまで児童生徒一人ひとりによって、希望している内容は異なるということです。

自認する性別の制服へと服装を切り替えることについて、本人も周りも抵抗感がほとんど生じずに行える場合もあれば、当面は体操着で過ごせるほうが本人にとっては安心という場合もあるでしょう。健康診断を一人で受けたいと希望する場合もあれば、レントゲンだけ配慮してもらえば大丈夫な子どももいます。性別を問わない「だれでもトイレ」が安心する子どももいれば、「だれでもトイレ」は教室から遠くて不便なので使いたくないという子どももいます。女子として登校しはじめた当初は「女子トイレを使うのは周囲の感情を考えると難しいのではないか」と学校側が考え、「だれでもトイレ」を使うことを提案していたような学校でも、同級生の理解があり「○○ちゃんはこっちでしょ」と他の女子生徒に手を引かれて女子トイレを使えるようになった事例などときどき耳にします。

文部科学省の資料はあくまで例示にすぎませんし、LGBTについて書かれた本や新聞記事に出てきた対応も、すべての当事者に当てはめられるものではありません。性別違和のある子どもへの対応はあくまでオーダーメイドで考える必要があります。本人や家族、周囲の状況などを考慮しながら、本人の訴えに耳を傾けて話し合っていくのがよいでしょう。



周囲にどうやって説明するか

高校生活の途中で、セーラー服から学ランへと制服を切り替えたいと希望する生徒から相談を受けたことがあります。その学校では前例のないことで、先生方も「いじめられるのではないかなどと心配をしていました。本人は学校全体にカムフラウトしたいと思っていますわけではない

なさそうでしたが、学校は全校集会でLGBTについて学ぶ機会をつくろうとしていました。その全校集会は、奇しくもこの生徒が制服を切り替えるのと同じタイミングで予定されていました。

LGBTについて学ぶ全校集会が突然開催され、そのタイミングで制服を切り替える生徒が出てくるとすれば、当然「あの子が当事者なんじゃないか」と周囲は考えます。生徒は「一日でも早く、この地獄のようなセーラー服から解放されたい。全校集会でLGBTの話をするまでは切り替えられないと先生に言われているから、一日でも早く学習会をやってほしい。だけど全校生徒に言いたいわけではない」と訴えています。私は、その高校の先生方に、学習会はいつでもできること、同じタイミングにする必要性はないのではないかと、ということをお伝えして、より安全などんな方法があるかを考えようと提案しました。

結果として、その生徒はクラスの中だけで、自分の言葉でカミングアウトすることにしました。同学年の他クラスの生徒には、接点があまりないので、疑問に思うことがあれば同級生から伝言で伝えてもらえればよい、ということになりました。他学年の生徒については、伝えないことにしたそうです。「他学年の生徒には関係のないことだから」と話していました。

その生徒は、クラスの全員に言う前に、日頃一緒にいることの多い部活動の友人たちに事情を話して応援してもらうことにしました。服装が変わりクラスにカミングアウトすると、しばらくはプレッシャーに感じることも増えます。そんなときに支えてくれる強力な理解者を得たことは、とても大きなことでした。結局、学ランの制服に切り替えて最初の1〜2週間は、すれ違う生徒の視線が気になったようですが、数か月も経てば、本人も周囲も違和感なく学校生活を送れるようになりました。外部講師を招いて全校生徒にレクチャーを行うより、キーパーソンである友人

たちの支えを得ながらクラス内に自分の口で言うことができ、本人の想いがきちんと伝わり、クラスとして本人の決断を応援する流れもつくれたのではないかと思います。

制服の切り替え時などに「全校生徒にカムフラアウトしてもらったほうがいいのでは」「学校全体で外部講師を招いて事前に講演をしてもらったほうがいいのでは」と考える先生方は多いのですが、外部講師の口から言えることと本人の口から言うことの重みはまったく違いますし、全校生徒に言わなくてはいけないケースは実際にはそこまで多くないはず。本人が話したいと思う相手は誰なのか、どのようにすれば本人の言葉で伝えやすくなるか、支えてくれる人は誰なのか、細やかに考えられるとよいでしょう。



「埋没」を好む子どももいる

トランスジェンダーの子どもの中には、すでに自認する性別での生活になじんでいて、かつて別の性別で生活していたことを特段周りに知られたくないと考える子どももいます。私の知っている小学生の中には、生まれたときには男の子で、幼少期の頃から性別違和を訴え、保護者の方の理解も得て、今ではすっかり女の子として学校に溶け込んでいる子どもが何人もいます。出生時にわりあてられた性別である女子としては学校に行けなかったのに、男子として新しい学校へ通い始めたら驚くほどにうまくいったという当事者もいます。

トランスジェンダーであることを周囲に知られず、移行先の集団になじんで生活していくスタイルのことを「埋没」と呼びます。カムフラアウトをしてようやく自認する性別で暮らしていけ

るタイプの人もいれば、ひっそり溶け込む「埋没」のほうが安心できるタイプの人もあります。

女子として扱われることと、「本当は男の子（身体的な性別を「本当の性別」と認識する人が世の中には残念ながら一定数存在します）だが、今は女の子」と認識されることでは、やはり周囲の受け止め方が変わります。男子としてなじんで生活できている生徒が「小学校三年生までは女子だった」ことを知られてしまうと、これまでとは同じように接してもらえなくなる場合もあります。そのため、「埋没」して暮らしたいタイプの当事者にとっては、プライバシーの確保はとても重要です。

入学してしばらく経ってから性別移行を考える際には、以前の性別を周りは知っているので「埋没」は難しくなりますが、入学した当初から相談があれば、一年生から「埋没」した状態で学校生活を送ってもらうことは選択肢の一つとして考えられます。

「埋没」している子どもの場合、着替えや宿泊行事の際の入浴などにプライバシー上の配慮が必要ことがあります。「埋没」している子どもがいる学校では、たとえトランスジェンダーであることが知られてしまってもダメージが少なくなるように、日頃から性の多様性について学校の中心でおおらかに受け止められるような環境づくりや声かけを心がけている場合が多いです。ある学校では絵本『りつとにじのたね』（ながみつまき文、いのうえゆうこ絵、リーブル出版、二〇一六年）を校長先生が読み聞かせしていました。

「全校へのカミングアウト」以外にも、さまざまに対応があることをぜひ知ってください。